



砺波総合病院から

病院のホームページもご覧ください。

市立砺波総合病院 ☎32-3320

口唇口蓋裂センター

形成外科 医長 森本 弥生

口唇口蓋裂とは

口唇から歯茎(歯槽)、上あご(口蓋)までに裂がみられるものをいいます。口唇裂とは口唇に裂があるもの、顎裂とは歯槽に裂があるもの、口蓋裂とは口蓋に裂があるものを指し、全体を総称して「口唇口蓋裂」と呼びます。片側と両側のものがあり、裂の程度は口唇の半分までのもの、裂が大きく口の中や鼻の中が覗けるようになっていたりするなど様々です。見てすぐに分かる形態の異常なので本人や家族の精神的負担の大きい疾患です。

機能的に口唇はミルクや食事を摂ることのほか、話すことや表情を表す働きもあります。歯槽は歯の発育に関係があります。また口蓋は言葉を作る(構音)大切な働きのほかに口で吹いたり吸ったりする動作を行うのに欠かせない働きをする部分でもあります。口蓋の骨の欠損や裂を閉じる手術操作の影響により発育が悪くなることがあります。上と下の歯の咬み合わせも、裂があることや上と下のあごの発育に差を生じることから様々な問題が起ります。

疫学、発生原因

発生頻度は、日本では約500人に1人程度といわれ、最も頻度の高い先天異常のひとつです。発生原因は不明な点が多く、多数の因子が関与しているとされています。胎児の口唇は胎

生7週ごろ、口蓋は胎生12週頃に、それぞれの元になる部分が癒合することで作られます。胎生期に全くの偶然、母胎の環境、何らかの薬剤、遺伝的因子など、小さな原因が積み重なった結果、ある一定の限界を超えたとき発生すると考えられています。

治療

口唇口蓋裂の治療は手術です。成長に伴い数回の手術が必要です。一般的に生後3か月頃に口唇裂の手術、1歳半頃に口蓋裂の手術、就学前に口唇や鼻の修正手術、10歳頃に歯槽裂に骨を移植する手術、顔の成長が完了する高校生以降に口唇や鼻の修正手術を行います。多くの場合、歯科矯正治療が必要になります。適切な治

療を受けることで、様々な問題を解消することができます。

当院の口唇口蓋裂センター

当院では1997年から塚田貞夫金沢医科大学形成外科名誉教授をセンター長として開設され、数多くの手術を行ってきました。2019年6月より後任として川上重彦金沢医科大学形成外科名誉教授を迎え、週1回(水曜日午後)外来診療、手術を行なっています。県内外の小児科、耳鼻咽喉科、矯正歯科、言語聴覚士などとも密に連携し、成長に応じて必要な治療を行い、機能的、整容的に障害を残さない治療を目指しています。ご不明な点がありましたら当院形成外科にお問合せください。



不全口唇裂



完全口唇裂・顎裂



両側口唇裂・顎裂



軟口蓋裂



硬軟口蓋裂



完全口唇顎口蓋裂



両側完全口唇顎口蓋裂 不全口唇裂・軟口蓋裂



粘膜下口蓋裂